

刺繡

島崎藤村

青空文庫

ふと大塚さんは眼が覺めた。

やがて夜が明ける頃だ。部屋に横たわりながら、聞くと、雨戸へ来る雨の音がする。いかにも春先の根岸辺の空を通り過ぎるよ
うな雨だ。その音で、大塚さんは起されたのだ。寢床の上で独り
耳を澄まして、彼は柔かな雨の音に聞き入った。長いこと、蒲団
や搔卷かいまきにくるまつて曲かがんでいた彼の年老いた身体が、復また延び
延びして来た。寢心地の好い時だ。手も、足も、だるかった。彼
は臥床ねどこの上へ投出した足を更に投出したかった。土の中に籠こもつて
いた虫と同じように、彼の生命いのちは復た眠から匍出はいだした。

大塚さんは五十を越していた。しかしこれから若く成つて行く

のか、それとも老境に向つてゐるのか、その差別のつかないような人で、氣象の壯さかんなことは壯年わかものに劣らなかつた。頼りになる子も無く、財産を分けて遣やる樂みも無く、こんな風にして死んで了しまうのか、そんなことを心細く考え易やすい年頃でありながら、何ぞというとは彼は癖のように、「まだそんな耄もうろく碌はしないヨ」と言つて見る方の人だつた。有り余る程の精力を持った彼は、これまでに散々種いろいろ々なことを經營して来て、何かまだ新規に始めたいとすら思つてゐた。彼は臥床の上にジツとして、書生や召使の者が起出すのを待つてゐられなかつた。

でも、早く眼が覚めるように成つただけ、年を取つたか、そう思ひながら、雨の音のしなくなる頃には、彼は最早もう臥床を離れた。

やがて彼は自分の部屋から、雨揚りの後の静かな庭へ出て見た。そして、やわらかい香気においの好い空気を広い肺の底までも呼吸した。長く濃かった髪は灰色に変わって来て、染めるに手数は掛かったが、よく手入していて、その額へ垂下って来るやつを搔かきあ上げる度たびに、若い時と同じような快感を覚えた。堅い地を割って、草の芽も青々とした頭もちあを擡もちあげる時だ。彼は自分の内部なかの方から何となく心こころ地もちの好い温あたたかさ熱あたたかさが湧わき上あって来ることを感じた。

例のように、会社の見廻りに行く時が来た。大塚さんは根岸にある自宅から京橋の方へ出掛けて、しばらく会社で時を移した。用ようたし達たしすることがあつて、銀座の通へ出た頃は、実に体からだ軀たが暢のび々びとした。腰の痛いことも忘れた。いかに自由で、いかに手足

の言うことを利くきような日が、復た廻り廻めぐつて来たろう。すこし逆上のほせる程の日光を浴びながら、店々の飾かざり窓まどなどの前を歩いて、尾張町おわりちようまで行つた。広い町の片側には、流行はやりの衣裳いしやうを着けた女おんな連れん、若い夫婦、外国の婦人などが往つたり来たりしていた。ふと、ある店頭みせさきのところで、買物している丸鬚まるまげ姿の婦人を見掛けた。

大塚さんは心に叫ぼうとしたほど、その婦人を見て驚いた。三年ほど前に別れた彼の妻だ。

避ける間隙すきも無かつた。彼女は以前の夫の方を振向いた。大塚さんはハツと思つて、見たような見ないような振をしながら、そ

のまま急ぎ足に通り過ぎたが、総身電氣にでも打たれたように感じた。

「おせんさん——」

と彼女の名を口中で呼んで見て、半町ほども行つてから、振返つて見た。明るい黄^{きみどり}緑の花を垂れた柳並木を通して、電車通の向側へ渡つて行く二人の女連の姿が見えた……その一人が彼女らしかつた……

彼女はまだ若く見えた。その筈^{はず}だ、大塚さんと結婚した時が二十で、別れた時が二十五だったから。彼女がある医者^{いしや}の細君に成つていふということも、同じ東京の中に住んでいふということも、大塚さんは耳にしていた。しかし別れて三年ほどの間よくも分ら

なかつた彼女の消息が、その時、閃くひらめように彼の頭腦あたまの中へ入つて来た。流行はやりの薄色の肩掛などを纏まとい着けた彼女の姿を一目見たばかりで、どういう人と暮しているか、どういう家を持っているか、そんなことが絶間とめどもなく想像された。

種いろいろ々な色彩いろに塗られた銀座通の高い建物の壁には温あたたか暖かな日あが映あつていた。用達の為ために歩き廻る途中、時々彼は往来で足を留めて、おせんのことを考えた。彼女が別れぎわ際ぎわに残して行つた長い長い悲かな哀しみを考えた。

恐らく、彼女は今幸しあわせ福ふくらしい……無邪気な小鳥……

彼女が行つた後の火の消えたような家庭……暗い寂しい日……それを考えたら何故あんな可愛い小鳥を逃がして了つたらう……

何故もつと彼女を大切にしなかつたろう……大塚さんは他人の妻に成っている彼女を眼まのあたりに見て、今更まのようにそんなことを考え続けた。

午後、会社へ戻ると、車夫が車を持って来て彼を待っていた。彼はそれに乗って諸ほうほう方馳かけずり廻るには堪たえられなく成つて来た。銀行へ行くことも止やめ、他の会社に人を訪ねることも止め、用達をそこそこに切揚げて、車はそのまま根岸の家の方へ走らせることにした。

大塚さんが彼女と一緒に成つたに就いては、その当時、親戚や友人の間に激しい反対もあつた。それに関かわらず彼は自分よりずっと年の若い女を扱えらんだ。楽しい結婚は何物にも換えられなかつた。

そんな風にして始まつた二人の結び付きから、不幸な別離わかれに終つたまでのことが、三年前の悲しいも、八年前の嬉しいも、殆どほとん緒に成つて、車の上にある大塚さんの胸に浮んだ。

もとより、大塚さんがおせんと一緒に成つた時は、初めて結婚する人では無かつた。年齢としが何よりの証拠だ。しかし親戚や友人が止めたように、八年前の彼は二十に成るおせんを妻にして、そう不似合な夫婦がそこへ出来上るとも思つていなかつた。活気と、精力と、無限の欲望とは、今だに彼を壮年のように思わせている。まして八年前。その証拠には、おせんと並んで歩いていた頃でも、誰も夫婦らしくないと言つた眼付して二人を見て笑つたものも無

かった。すくなくも大塚さんにはそう思われた。どうして、おせんが地味な服装なりでもして、いくらか彼の方へ歩あゆび寄るどころか。彼女は今でもあの通りの派手づくりだ。若く美しい妻を専有するということとは、しかし彼が想像したほど、唯楽しいばかりのものでも無かった。結婚して六十日経つか経たないに、最早もう彼は疲れて了った。駄目、駄目、もうすこし男性おとこの心情が理解されそうなものだとか、もうすこし他ひとの目に付かないような服装みなりが出来そんなものだとか、もうすこしどうかいう毅然しやんとした女に成れそんなものだとか、過すぐる同棲どうせいの年月の間、一日として心に彼女を責めない日は無かった――

三年振で別れた妻に逢って見た大塚さんは、この平素ふだん信じてい

たことを——そうだ、よく彼女に向つて、誰^{だれ}某^{それ}は女でもなかなかかのシツカリものだなどと言つて褒^ほめて聞かせたことを、根から底^{ひつくりかえ}から転^{ひつくりかえ}倒^{ひつくりかえ}されたような心^{こころもち}地^ちに成つた。「シツカリものだが何だ」こう以前の自分とは反^{あべこべ}対^{あべこべ}なことを言つて、家へ戻つて来た。彼は自分の家の内に、居ないおせんを捜した。幾つかある部屋部屋へ行つて見た。

^{なか}内の庭に向いた廊下のところで、白い毛の長いマルが主人を見つけて馳^かけて来た。おせんのいる頃から飼^{ちん}われた狎^{なり}犬だ。体^{そと}軀^{そと}は小さいが、性質の賢いもので、よく人に慣れていた。二人で屋^{そと}外^{そと}からでも帰つて来ると、一番先におせんの足音を聞付けるのはこのマルだった。そして、彼女の裾^{すそ}に纏^{すそ}い着いたものだ。大塚さんは、

この小さい犬を抱いて可愛がったおせんが、まだその廊下のところに立っているようにも思った。

食堂へ行つて見た。そこにはおせんが居た時と同じように、大きな櫛けやきづくりの食卓が置いてある。黒い六角形の柱時計も同じように掛つている。大塚さんはその食卓の側に坐つて、珈琲コーヒーでも持つて来るように、と田舎々々した小娘に吩咐いいつけた。廊下を隔てて勝手の方が見える。働好きな婆さんが上草履うわぞうりの音をさせている。小娘は婆さんの孫にあたるが、おせんの行った後で、田舎から呼び迎えたのだ。家には書生も二人ほど置いてある。しかし、おせん時代のことを知っているものは、主人思いの婆さんより外

に無かつた。婆さんは長く奉公して、主人が食物くいものの嗜好しこうまでも好く知つていた。

小娘は珈琲茶ぢやわん碗わんを運んで来た。婆さんも牛乳の入物を持って勝手の方から来た。その後から、マルも随ついて入つて来た。

「マルも年をとりまして御座いますよ。この節は風邪かぜばかり引いて、嚏くしゃみばかり致しております」

こう婆さんが話した。大塚さんはその日別れた妻に逢つたことを、誰も家のものには言出さなかつた。

マルは尻尾しつぽを振りながら、主人の側へ来た。大塚さんが頭を撫なでてやると、白い毛の長く掩おおい冠かぶさつた額を向けて、狎ならしい眼付で彼の方を見て、嬉しそうに鼻をクンクン言させた。

こうして家の内を眺め廻した時は、おせんらしいおせんが一番その静かな食卓の周囲まわりに居るように思われた。おせんは夫を助けて働ける女では無かったし、殊ことに客なぞのある場合には、もうすこし細君らしい威厳を具そなえていたら、と思うことも多かった。

「奥様はあんまり愛あい嬌きょうが有り過ぎるんで御座いますよ、誰にでも好くしようと成さり過ぎるんで御座いますよ」と婆さんまでが言う位だった。でも食卓の周囲などは楽しくした方で、よくその食堂の隅すみのところに珈琲を研ひく道具を持出して、自分で煎いったやつをガリガリと研いたものだ。

香ばしい珈琲のにおいは、過去った方へ大塚さんの心を連れて行った。マルを膝ひざに乗せて、その食卓むかにむか対むか合むかつていた時の、彼

女の軽い笑を、まだ大塚さんは聞くことが出来た。毛糸なども編むことが上手で、青と白とで造った円形の花瓶敷かびんを敷いて、好い香のする薔薇ばらでその食卓の上を飾って見せたものだ。花は何に限らず好きだったが、黄な薔薇は殊におせんが好きな花だった。そして、自分で眼を細くして、その香氣においを嗅いで見るばかりでなく、それを家のものにも嗅がせた。マルにまで嗅がせた。まだ大塚さんはその食卓の上に載せた彼女の白い優しい手を見ることが出来た。その薔薇を花瓶のまま持って夫に勧めた時の、彼女の呼吸までも聞くことが出来た。

庭へ行つて見た。食堂から奥の座敷へ通うところは廻廊風に出

来ていて、その間に静かな前せんざい栽がある。可かなり成広い、植木の多い庭が前栽つづきに座敷の周囲まわりを取繞とりまっている。古い小さな庭井戸に近く、毎年のように花をつける桜の若木もある。他の植木に比べると、その細い幹はズンズン高くなつた。最早紅くふくらんだ蕾つぼみを垂れていたが、払あけがた暁の温かい雨で咲出したのもある。そこはおせんが着物の裾を帯の間に挿はさんで、派手な模様の長襦袢ながじゆばんだけ出して、素足に庭下駄を穿はきながら、草むしりなぞを根気にしたところだ。大塚さんは春らしい日の映あつた庭土の上を歩き廻つて、どうかすると彼女が子供ののように快活であつたことを思出した。

そうだ。優しい前髪と、すらりとした女らしい背とを持った子

供だつた。彼女が嫁かたづいて来たばかりの頃は、大塚さんは湯島の方にもつと大きな邸やしきを持つていたが、ある関係の深い銀行の破産から、他ひとに貸してあつたこの根岸の家の方へ移り住んだのだ。そういう時に成ると、おせんは何をして可いいかも解らないような人で、自分の櫛くし箱ばこの仕末まで夫の手を煩わづらわして、マルを抱きながら、それを見ていたものだ。それほど子供らしかった。ああいう時には、大塚さんはもう嘆息して了つた。でも、この根岸へ移つて落着いてからは、春先に成ると蓬よもぎの芽を摘みに行くところがあると悦んで、軽々とした服装みなりをしては出掛けて行つて、その帰りにはすみれ董の花などを植木屋から買つて戻つて来た。その無邪気さには、又、憎むこともどうすることも出来ないようなところが有つた。

こういう娘のような気で何時までも居て、時には可愛くて可愛くて成らなかつたおせんが、次第に大塚さんには見ても飽き飽きする様な人に変つて行つた。彼女と別れる前の年あたりには、大塚さんは何でも彼女の思う通りに任せて、万事家のことは放^{うっちゃ}擲^{らか}して了つた。小言一つ言わなかつた……唯、彼女を避けよう

とした……そして自分は会社のことにはばかり出歩いた……さもなければ、会社の用事に仮托^{かこつ}けて、旅にばかり出掛けた……そんなことをして、名のつけようの無い悲哀^{かなしみ}を忘れようとした……

おせんと同棲して五年ばかり経つた時の大塚さんは、何とかして彼女と別れる機会をのみ待つた。機会が来た……しかも堪え難い形でやって来た……それを大塚さんは考えた。

彼女の旧の居間もとへ行つて見た。今は親しい客でも有る時に通す特別な応接間に用いている。そこだけは、西洋風にテーブルを置いて、安楽椅子に腰掛けるようにしてある。大塚さんはその一つに腰掛けて見た。

可傷いたましい記憶の残っているのも、その部屋だ。若く美しい妻を置いて、独りで寂しく旅ばかりするようになるに成つたということや、あれ程親戚友人の反対が有つたにも関わらず、誰の言うことも聞入しまれずに迎えたおせん、その人と終しまには別れる機会をのみ待つように成つて行つたということは、後から考えれば、夢のようだ。實際、それが事実であつたから仕方ない。何物にも換えられなかつ

た楽しい結婚しとねの褥とね、そこから老い行く生命いのちを嘔かむような可恐おそろしい虫はいだが這出はそうとは……

大塚さんは彼女を放うつちやらか擲かして関かまわずに置いた日のことを考えた。あらゆる夫婦らしい親したしみ密たのしみも快楽たのしみも行つて了つたことを考えた。おせんは編物ばかりでなく、手工しまいに關したことは何でも好きな女で、刺繡ししゅうなぞも好くしたが、終しまにはそんな細い仕事にまぎれてこの部屋で日を送っていたことを考えた。

悲しい幕が開けて行つた。大塚さんはその刺繡台の側に、許し難い、若い二人を見つけた。尤もつとも、親しげに言葉の取換とりかわされる様子を見たというまでで、以前家に置いてあつた書生が彼女の部屋ではいりへ出入でしたからと言って、咎とがめようも無かつたが……疑えば

疑えなくもないようなことは数々あつた……彼は鋭い刃物の先で、妻の白い胸を切開いて見たいと思つた程、はげ烈しい嫉妬しつとで震えるように成つて行つた。

そこまで考え続けると、おせんのことばかりでなく、大塚さんは自分自身が前よりはハッキリと見えて来た。そういう悲しい幕の方へ彼女を追い遣やつたのは、誰か。よしんばおせんは、彼女が自分で弁解したように、罪の無いものにもせよ——冷やかに放うっち擲やらかして置くような夫よりは、意気地は無くとも親切な若者よろこを悦よろこんだであろう。それを悦ばせるようにしたものは、誰か。そういうことを機会に別れようとして、彼女の去る日をのみ待つていたものは、一体誰か。

制^{おき}え難い悔恨の情が起つて来た。おせんがこの部屋で堇の刺繍なぞを造ろうとしては、花の型のある紙を切^{きれ}地に宛^{あて}行つたり、その上から白^{おしろい}粉を塗つたりして置いて、それに添^あうて薄紫色のすが糸を運んでいた光景^{さま}が、唯^{なみだ}涙^{もろ}脆^{もろ}かつたような人だけに、余計可哀そうに思われて来た。大塚さんは、安樂椅子に倚^よりながら、種^{いろいろ}々なことを思出した。若い妻が訳もなく夫を畏^{おそ}れるような眼付して、自分の方を見たことを思出した。彼女の鼻をかむ音がよくこの部屋から聞えたことを思出した。

今居る書生の一人がそこへ入つて来た。訪問の客のあることを告げた。大塚さんは沈思を破られたという風で、誰にも逢いたくないと言つて、用事だけ聞いて置くようにとその書生に吩^い咐^いけた。

「いずれ会社のを伺わせませす、その節は電話で申上げますツて、そう言つてくれ給え」

と附添えて言つた。大塚さんが客を謝ことわるといふは、めずらしいことだつた。

書生が出て行つた後、大塚さんはその部屋の内を歩いて、そこに筆筒たんすが置いてあつた、ここに屏風びょうぶが立て廻してあつた、と思ひ浮べた。襖ふすま一つ隔てて直ぐその次にある納戸なんどへも行つて見た。そこはおせんが鏡に向つて髪をとかした小部屋だ。彼女の長い着物や肌はだにつけた襦袢はだかなどがよく掛つていたところだ。

何か残つている物でも出て来るか、こう思つて、大塚さんは戸

棚の中までも開けて見た。

そうだ、おせんは身に覚えが無いと言って泣いたりしたが、終しまいには観念したと見え、紅く泣腫はらした顔を揚げて、生家さとの方へ帰れという夫の言葉に随したがった。そんな場合ですら、彼女は自分で自分の身のまわりの物をどう仕末して可いかも解らなかつた。殆んど途方に暮れていた。夫の手伝いなしには、碌ろくに柳行李やなぎごうり一つ纏まとめることも出来なかつた。見るに見兼ねて、大塚さんは彼女の風呂敷包までも包み直して遣った。車に乗るまでも見て遣った。まるで自分の娘でも送り出すように。それほど無邪気な人だつた。

納戸から、部屋を通して、庭の方が見える。おせんが出たり入ったりした頃の部屋の光景さまが眼に浮ぶ。庭には古い躑躅つづじの幹もあ

つて、その細い枝に紫色の花をつける頃には、それが日に映じて、部屋の障子までも明るく薄紫の色に見せる。どうかすると、その暖い色が彼女の仮うたたね寝している畳の上まで来ていることも有った。急に庭の方で、

「マル——来い、来い」

と呼ぶ書生の声が起った。

マルは廊下伝いに駆出して来た。庭へ下りようともせず、戯ふざけるような声を出して鳴いた。

おせんが子のように愛した狛の鳴声は、余計に彼女のことを想わせた。一人も彼女に子供が無かったことなぞを思わせた。大塚さんは納戸を離れて、部屋にある安楽椅子の後を廻った。廊下へ

出て見ると、咲きかけた桜の若葉が眼前めのまえにある。麗かな春の光は花に映じている。

マルは呻うめくような声を出しながら、主人の方へ忍んで来たが、やがて掻かき付いて嬉しげに尻尾を振って見せた。この長く飼われた犬は、人の表情を読むことを知っていた。おせんが見えなく成った当座などは、家の内を探し歩いて、ツマラナイような顔付をして萎しおれ返っていたものだ。

大塚さんはマルを膝の上に乗せて、抱締るようにして顔を寄せた。白い、柔な狛の毛は、あだかもおせんの頬に触れる思をさせた。

別れるのは反かえつてお互の為だ、そんなことをおせんに言い聞かせて、生家さとの方へ歸してやった。大塚さんはそれも考えて見た。別れて何か為に成つたらうか。決してそうで無かつた。後に成つて、反つて大塚さんは眼に見えない若い二人の交とりかわ換す言葉や、手紙や、それから逢あひびき曳する光景さままでもありありと想像した。それを思うと仕事も碌々手に着かないで、ある時は二人の在ありか処を突留めようと思つたり、ある時は自分の年としが甲斐も無いことを笑つたり、ある時は美しく節操みさおの無い女の心を卑しんだりして、それ見たかと言わないばかりの親戚友人あざけりの嘲の中に坐つて、淋しい日を送つたことが多かつた。彼女が後へ残して行つた長い長い悲哀かなしみは、唯さえ白く成つて来た大塚さんの髪を余計に白くした。

おせんがある医者のところへ嫁かたづいたという噂は、何か重荷でも卸したように、大塚さんの心を離れさせた。曾かつて彼の妻であつた人も、今は最早全く他人のものだ。それを彼は実際に見て来たのだ。

万事大塚さんには惜しく成つて来た。女というものの考え方からして變つて来るように成つた。男性おとこの心情などはそう理解されなくとも可いい、仕事の手伝いなぞはどうでも可いい、と成つて来た。働き者だとか、気性まき勝りだとか言われて、男と戦おうとばかりするような毅然しやんとした女よりも、反つて涙脆なみい、柔軟やわらかな感じのする人の方が好ましい。快活であれば猶なほ好いい。移り気も一概には退なけられない。不義する位のもは、何処かに人の心を引く可な懐かしみ

もある。ああいうおせんのような女をよく面倒見て、氣長に注意を怠らないようにしてやれば、年をとるに随つて、存外好い主婦と成つたかも知れない。多情も熟すれば美しい。

人間の価値ねうちはまるで転倒して了つた。彼はおせんと別れるより外に仕方が無かつたことを哀かなしく思つた。何故初めからもつと大切にするとは出来なかつたらうと思つて見た。

マルの毛を撫でながら、こんな考えに沈んでいるところへ、律ちぎがお義かお顔な婆さんが勝手の方から廊下を廻つてやつて来た。

大塚さんの親戚からと言つて、春らしい到来物が着いた。青々とした笹ささきの葉の上には、まだ生きているようなかたい鱧いくひきが幾尾かあつた。それを見せに来た。婆さんは大きな皿を手に持つたまま、大

塚さんの顔を眺めて、

「旦那様は御塩焼の方が宜しゅう御座いますか。只今は誠に御魚の少い時ですから、この鰈はめずらしゅう御座いますよ。鰹に鱈なぞはまだ出たばかりで御座いますよ」

こう言つて主人の悦ぶ容子を見ようとした。

何かおせんの着物で残っているものはないか。こう大塚さんは何気なく婆さんに尋ねた。

婆さんは不思議そうに、

「奥様の御召物で御座いますか。何一つ御残し遊ばした物は御座いません。何から何まで御生家の方へ御送りしたんですもの……何物も置かない方が好いなんと仰つて……そりや、旦那様、御寝

衣^{まき}まで後で私が御洗濯しまして、御蒲団やなんかと一緒に御送り
いたしました」

と答えたが、やがて独^{ひとりごと}語でも言うように、

「旦那様は今日はどう遊ばしたんですか……奥様の御召物が残っ
ていないかなんて、ついぞそんなことを御尋ねに成ったことも無
いのに……」

こう言つて見て、手に持った魚の皿を勝手の方へ運んで行つた。
庭で鳴く小鳥の声までも、大塚さんの耳には、復た回^{めぐ}つて来た
春^{せきせきや}を私語いた。あらゆる記憶が若草のように蘇^{いきかえ}生る時だ。楽し
い身体の熱は、妙に別れた妻を恋しく思わせた。

夕飯の頃には、針仕事に通つて来ている婦^{おんな}も帰つて行つた。書

生は電話口でしきりとガチャガチャ音をさせていた。電燈の点いた食堂で、大塚さんは例の食卓に対つて、おせんと一緒に食つた時のことを思出した。燈火あかりに映つた彼女の頬を思い出した。殊に湯上りの時などはその頬を紅くして笑つて見せたことを思出した。「御塩焼は奈何いかがで御座いますか。もし何でしたら、海胆うにでも御着け遊ばしたら——」

と言つて婆さんは勝手の方から来た。婆さんの孫娘がかしこまつて給仕する側には、マルも居て、主人の食う方を眺めたが、時々物欲しそうな声を出したり、拝むような真似まねをしたりした。

音沙汰おとさたの無い、どうしているか解らないような子息むすこのことも、

大塚さんの胸に浮んだ。大塚さんは全く子が無いでは無い。一人

ある。しかも今では音信不通な人に成っている。その人は大塚さんがずっと若い時に出来た子息で、体格は父に似て大きい方だった。背なぞは父ほどあつた。大塚さんがこの子息におせんを紹介した時は、若い母の方が反つて年少とししただつた。

湯島の家の方で親子揃そろつて食つた時のことが浮んで来た。この同じ食卓がああの以前すまいの住居すまいに置いてある。青蓋あおがさの洋燈ランプが照している。そこには嫁かたづいて来たばかりのおせんが居る。彼女のことを「おせんさん、おせんさん」と親しげには呼んでも、決して「母親おつかさん」とは言わなかつた彼の子息が居る……尤も、その頃から次第に子息は家へ寄付かなく成つて行つたかとも思われる。

食事の済む頃に、婆さんは香ばしく入れた茶と、干葡萄ほしぶどうを小皿に盛つて持つて来て、食卓の上に置いた。それを主人に勧めながら、お針に来ておんないる婦の置いて行つたという話をした。

「あの方がそう申しますんですよ。是方こちらの旦那様も奥様を探して被い入らしやる御様子ですが、丁度好きそうな人が御座いますとかつて。聞き込んだ筋が好いそうでした……なんでも御家は御寺様だそうで御座いますよ……その方はあんまり御家の格が好いものですから、それで反つて御嫁そこなに行き損つて御了いなすつたとか。学問は御有んなさるし、立派な御方なんだそうで御座います。御年は四十位だとか申しました。まだ御独身おひとりで。よく華族様方の御嬢様なぞにも、そういう風で、年をとつて御了いなさる方が御有ん

なさいますそうですよ……それからあの人が、丁度あの位の奥様が御為にも宜しかろうかつて、そう申してますよ……尤も、こればかりは御縁で御座いますから」

こういう話を聞く度に、大塚さんは耳を塞ぎたかつた。

おせんのような妻と一緒に住むような日は、最早二度と無かるうか。それを思うと、銀座で逢った人が余計に大塚さんの眼前めのまえに彷彿ちらついた。黄ばんだ柳の花を通して見た彼女——仮令たとえ一目でもそれが精くわしく細かく見たよりは、何となく彼女の沈着おちついて来たことや、自然に身体の出来て来たことや、それから全体としての女らしい姿勢を、反つてよく思い浮べることが出来た。

その晩、大塚さんは自分の臥ねたり起きたりする部屋こもに籠こもつて、

そこに彼女を探して見た。戸棚から、用筆筒から、古い手紙の中までも探した。彼女が夫に宛てて書いたということは極く稀まれだった。それすら何処どこかへ散じて了った。

刺繍が出て来た。彼女の手縫にしたものだ。好い記念だ。紅い薔薇の花はな弁びらが彼女の口唇くちびるを思わせるように出来ている。大塚さんはそれを自分の顔に押宛て押宛てして見た。

あたたか温あたたか暖あたたかい晩だ。この陽気では庭の花ざかりも近い。復た夜が明けてからの日光も思いやられる。光と熱——それはすべての生物の願いだ。とは言いなながら、婆さんでも、マルでも、事実それを樂むことは薄らいで来た。周囲あたりのものは皆な老い行く。そういう中で、大塚さん独りはますます若くなつて行つた……

青空文庫情報

底本：「旧主人・芽生」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年2月15日初版発行

1970（昭和45）年2月15日2刷

入力：紅邪鬼

校正：菅野朋子

2000年5月20日公開

2005年12月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

刺繍

島崎藤村

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>